

教育・保育実習が幼稚園、保育所および施設に対するイメージに及ぼす影響

大 島 浩

教育実習および保育実習は、幼児教育者を養成する機関に学ぶ学生が、保育の現場に実地におもむいて、それまでに養成機関で学んだ知識や技術を応用し、直接に幼児・児童と接し、現場に解れる機会である。幼児教育者の養成にあたっては、実習は大きな意味を持ち、専門科目の一部として行なわれている。

養成機関において、学生は保育や幼児教育について色々な知識と技術を学んでいる。しかし、大学で学んだ知識や技術はそのままでは完全に身につくとは言いがたい。実習をすることによって、これらの知識や技術が真の生きた知識や技術となるであろう。

教育・保育実習の目標としては、次のようなものがあげられている。

1. 幼稚園、保育所、および児童福祉施設の内容、機能等を実地の体験を通して理解する。
2. 実地に幼児・児童と接することによって、幼児・児童に対する理解を深め、さらに、保育に関する知識や技術を身につける。
3. 保育の現場での生活体験を通して、自らの児童観、保育観を確立し、将来幼児教育者になる者としての自覚を高める。
4. 実習の経験を基にして、今後の学習に対する動機づけとする。

本研究では、これらの目標のうち、実習施設に対する理解に関して、実習体験が、学生が持っている、幼稚園、保育所、および施設に対するイメージをどのように変化させるかという観点から考察した。

学生が実習前に持っているイメージは、学生の過去の体験や養成機関での学習によって形成されたものであり、実習を体験することによってそのイメージは影響を受け変化を示すであろう。その変化の様子を分析することによって、実習施設の理解という実習の目標がどの程度達成されたかを検討することが出来るであろう。また、イメージの変化の方向を分析することによって、実習の効果を検討し、今後の幼児教育者の養成における実習のあり方についても考察を加えようとする。

イメージ調査の対象者となった学生は、2年間に3種の実習を経験するが、本研究では、その内の、児童福祉施設実習および幼稚園教育実習が実習施設に対するイメージをどのように変化させるかを検討した。

方 法

25対の形容詞対を用いた SD法 (Semantic Differential method) によって、実習施設に対するイメージを 7 段階に評定させる。25対の形容詞対は、笛野 (1977) で使用されているものをそのまま用いた。(Fig. 1 ~ 6 を参照)

イメージ評定の対象となる実習施設は、幼稚園、保育所、児童福祉施設の 3 種類とした。

評定者は、美作女子大学短期大学部幼児教育学科の昭和52年度入学生、163名で、昭和52年2月に行なわれた児童福祉施設実習の前後、および、昭和53年6月に行なわれた幼稚園教育実習の前後、計4回のイメージ評定を行なわせた。評定者163名の内、病気欠席、休学等で4回の評定のうちいずれかが実施出来なかった学生があったので、最終的には、145名のイメージ評定を用いて結果の分析を行った。

結 果

A. 児童福祉施設実習前のイメージ (Fig. 1)

施設実習前のイメージ評定によれば、児童福祉施設は、重要で、むずかしく、地味で、複雑で、充実しているというイメージが持たれている。また、幼稚園と保育所についてのイメージは、相互にかなり類似しており、幼稚園および保育所は、明るく、活動的で、健康的であり、あたたかく、充実していると考えられている。幼稚園と保育所のイメージが類似していることは、評定値から計算されたイメージ間の距離 D_{ij} が、幼稚園と施設の間では 6.02、保育所と施設の間では 5.21 と大きいのに対し、幼稚園と保育所の間では 1.68 と小さいことでも解る。

幼稚園と保育所に対するイメージの間で大きな差のある項目を挙げると、幼稚園は保育所よりも、より明るく、知的で、近代的で、はでであると考えられており、又、保育所は幼稚園より家庭的であると考えられている。

児童福祉施設に対するイメージと、幼稚園・保育所に対するイメージの間には大きな差があり、<安全な - 危険な><支配的な - 服従的な>以外のすべての項目で、評定値間に有意差がある ($P < .001, df = 144$)。施設実習前の施設に対するイメージを、幼稚園・保育所に対するイメージと比較すると、施設は、より重要で、複雑であり、静かで、緊張しており、むずかしく地味であると感じられている。さらに、施設は他の二者よりも、暗く、冷く、きたなく、窮屈で、親しみにくく、不健康で、不活発であるというマイナスのイメージが強い。

B. 児童福祉施設実習後のイメージ (Fig. 2)

10日間の児童福祉施設実習が終了した直後のイメージは、実習前のイメージからかなり変化している。施設実習後の施設に対するイメージは、施設は重要で、明るく、充実しており、あたたかく、親しみやすいとなっている。一方、幼稚園・保育所は、明るく、活動的で、健康的であり、さわがしく、楽しく、充実していると感じられている。また、幼稚園と保育所の間のイメージの違いにつ

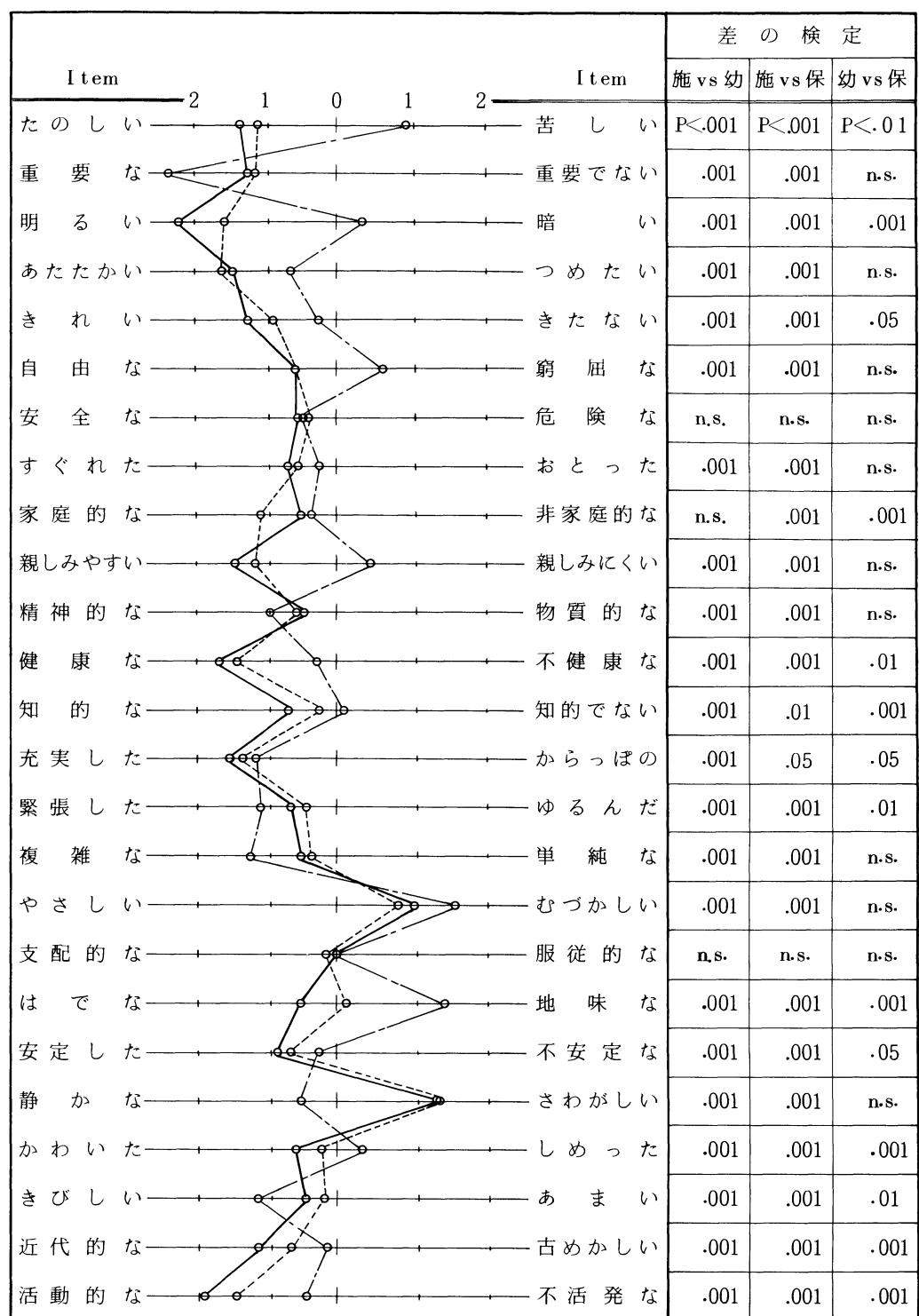


Fig. 1 児童福祉施設実習前の幼稚園・保育所・施設に対するイメージ

○—○ 幼稚園
○---○ 保育所
○—○ 施設

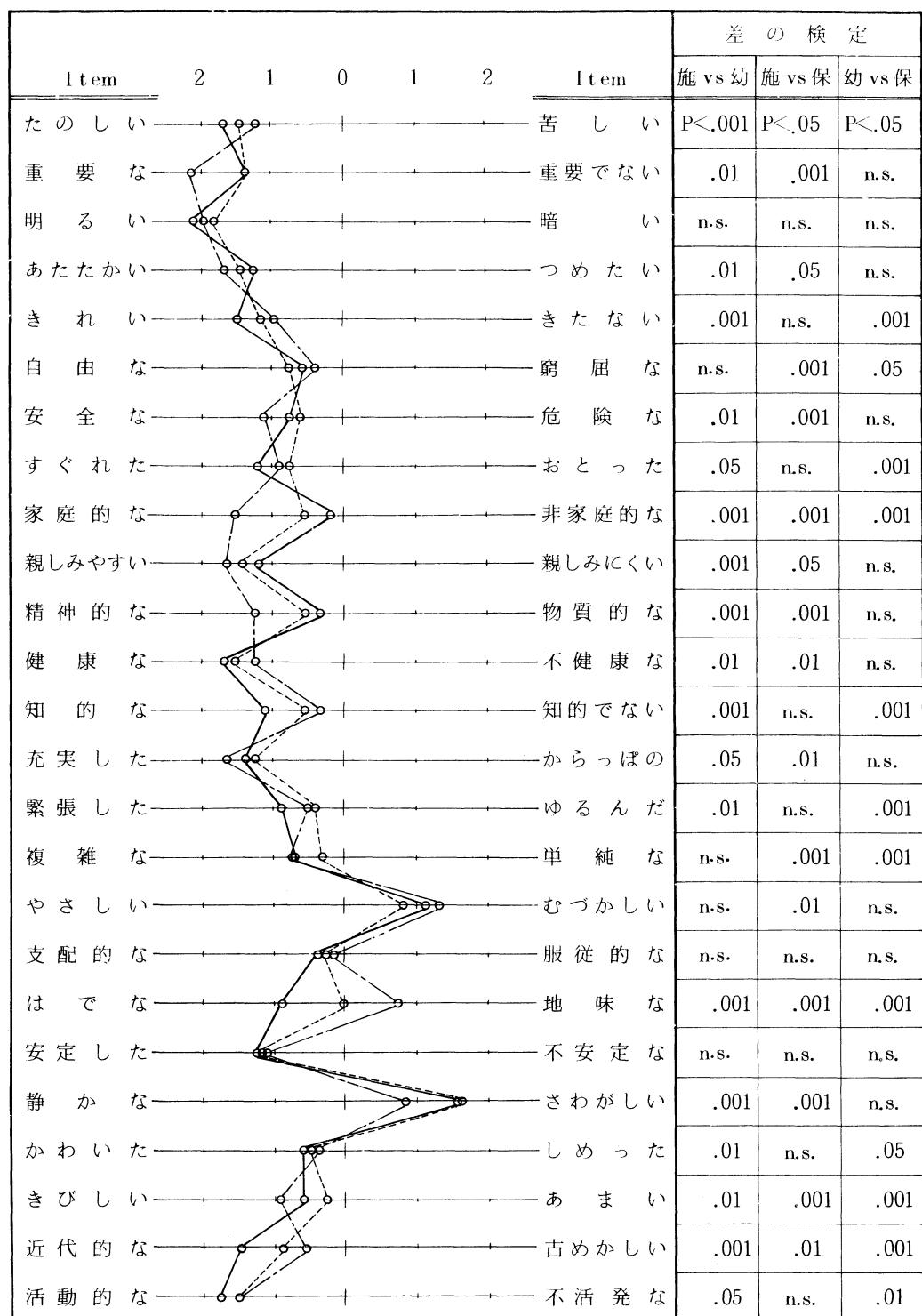


Fig. 2 施設実習後の幼稚園・保育所・施設に対するイメージ

○—○ 幼稚園
○---○ 保育所
○- -○ 施設

いては、幼稚園は保育所より知的で、近代的で、はでであり、きびしく、緊張しており、又、保育所は幼稚園に比べより家庭的であると感じられている。

実習前には、幼稚園・保育所と施設に対するイメージの間の距離は大きかったが、実習後は小さくなっている。イメージ間の距離は、幼稚園と施設の間では 2.97、保育所と施設の間では 2.14、幼稚園と保育所の間では 1.56 となっている。

実習後の施設に対するイメージは他の二者に対するイメージに比較するとプラスのイメージとなっており、施設は他より、より重要で、家庭的で、静かであり、精神的で、地味であり、きびしいと感じられている。

C. 児童福祉施設実習の影響について (Fig. 3)

施設実習を経験したことによって、児童福祉施設に対するイメージが大きく変化した。Fig. 3 に、実習前後の施設に対するイメージをプロットしてある。これによると、<支配的な－服従的な><精神的な－物質的な>の 2 対の評定以外はすべて、実習の前後で評定値の間に有意な差がある。さらに、変化の方向も、<緊張した－ゆるんだ><複雑な－単純な><はでな－地味な><静かな－さわがしい>などの対ではマイナスの方向に変化しているが、残りの大部分の評定値は、プラスの方向に変化している。すなわち、学生が実習前に施設に対して持っていた、暗く、つめたく、きたなくて、窮屈で、親しみにくく、不健康で不活発であるといったイメージのマイナスの側面は、実習生として現場を直接に見聞きし、収容児童と接するという体験を通して消失して行き、施設が幼稚園や保育所と同じ位に、明るく、あたたかく、健康で活動的であり、幼稚園と同じ位に自由で、保育所と同じ程度きれいで、さらに、幼稚園や保育所よりも親しみやすいというように、プラスのイメージが強くなっている。

又、児童福祉施設での実習経験が、幼稚園および保育所についてのイメージにおよぼす影響は余り大きくなく、実習の前後でのイメージ間の距離 D_{ij} は、施設イメージについては 5.02 であるのに対し、幼稚園については 1.09、保育所については 1.17 であった。

D. 幼稚園教育実習前のイメージ (Fig. 4)

幼稚園実習前の幼稚園に対するイメージは、明るく、活動的で、健康的で、充実しており、むずかしいというイメージである。保育所については、明るく、あたたかく、重要であり、活動的で、さわがしいというイメージが持たれている。一方、施設に関しては、重要で、充実しており、むずかしく、きびしく、あたたかいというイメージが持たれている。

また、幼稚園は、保育所に比較して、より明るく、むずかしく、はでで、近代的であり、健康的で、知的で、充実しており、きびしく、活動的であると考えられており、逆に、保育所は幼稚園に比べて家庭的であると考えられている。又、幼稚園は施設と比較して、はでで、さわがしく、明るく、自由で、たのしく、きれいで、健康的で、活動的であると感じられており、施設は幼稚園に比べて、きびしく、複雑であると考えられている。

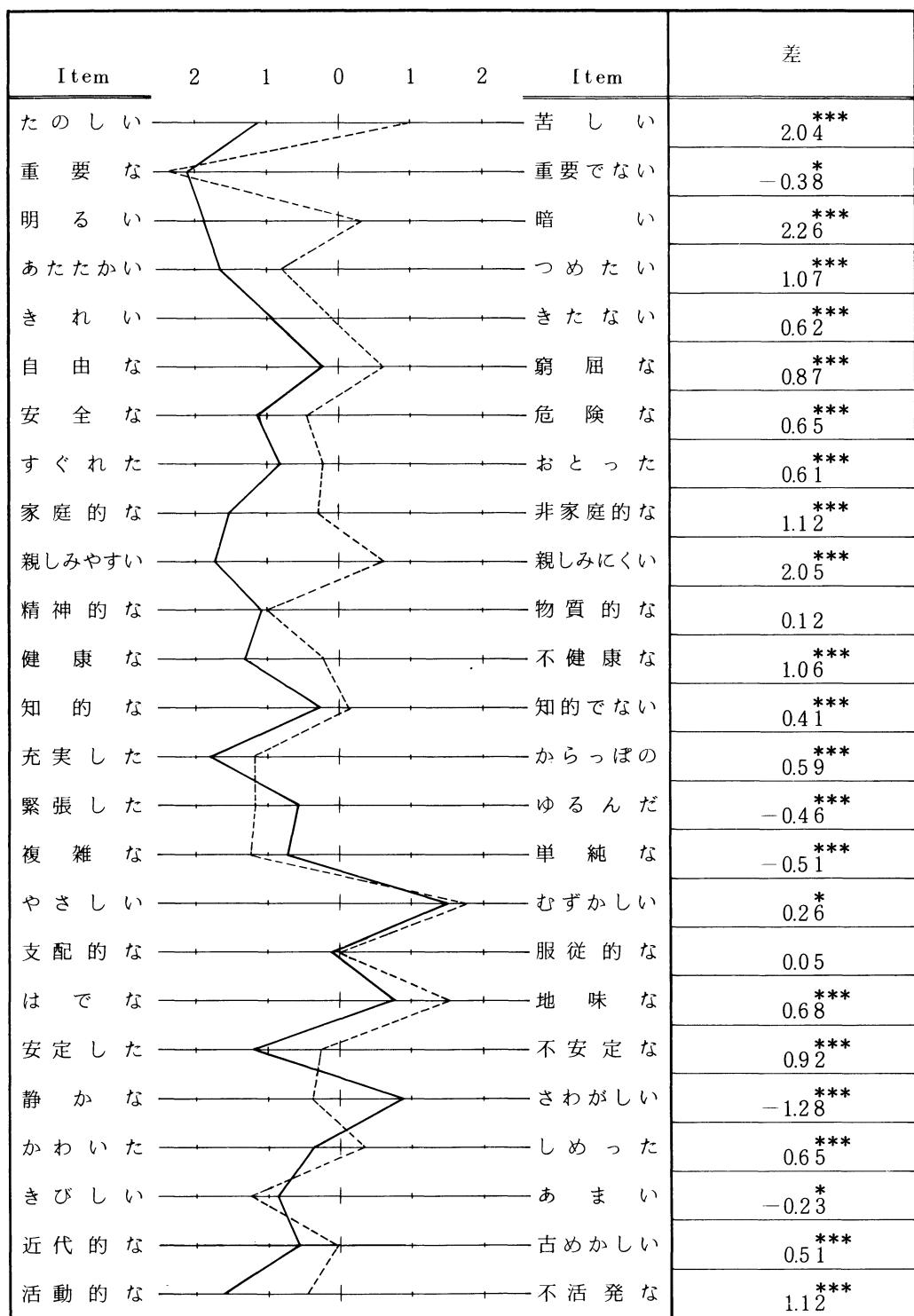


Fig. 3 施設実習による施設に対するイメージの変化

----- 実習前

—— 実習後

[注] *** P<.001, ** P<.01, * P<.05

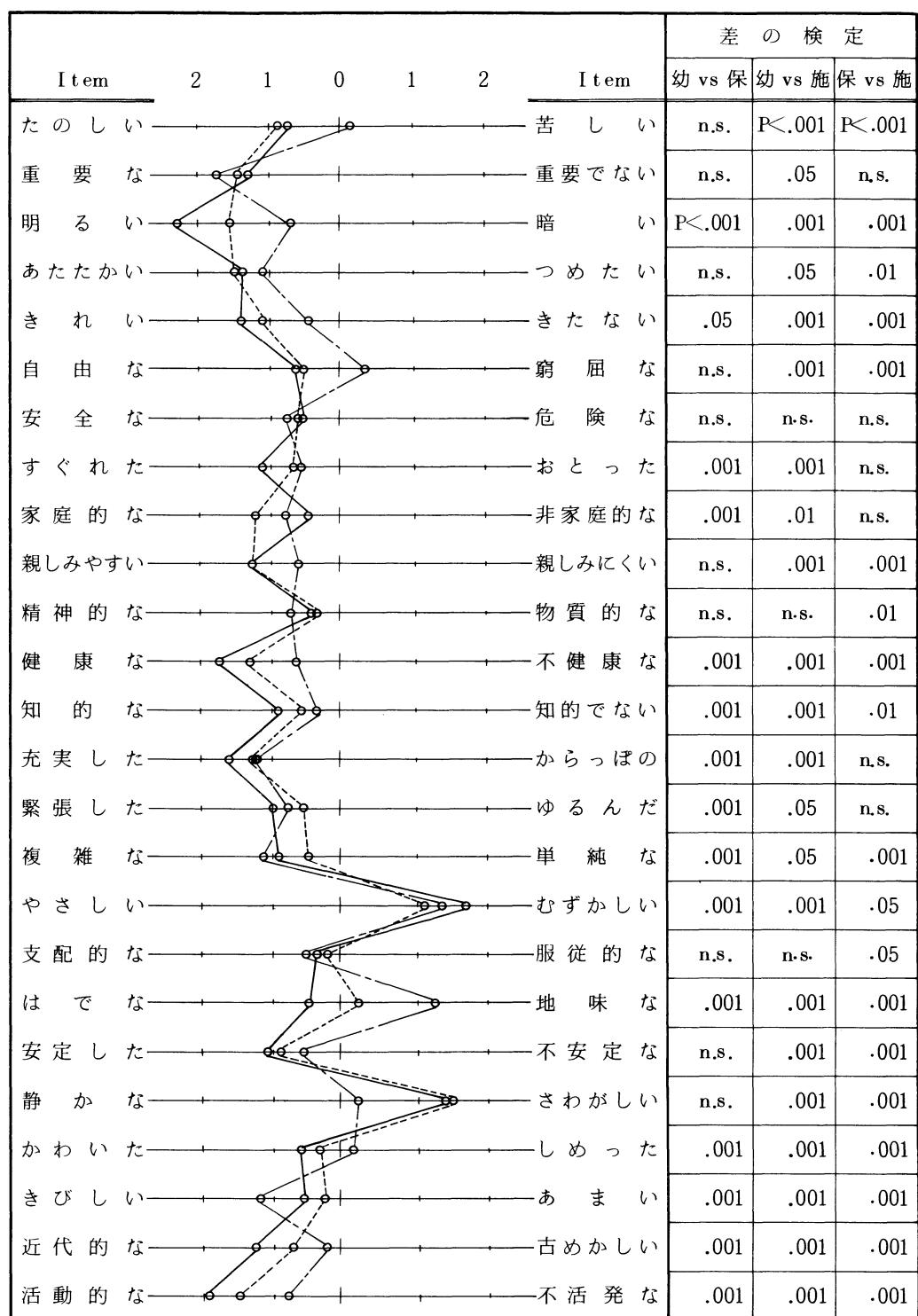


Fig. 4 幼稚園教育実習前の幼稚園・保育所・施設に対するイメージ

○—○ 幼稚園
○---○ 保育所
○—○ 施設

各イメージ間の距離 D_{ij} は、幼稚園と保育所の間が 1.82、幼稚園と施設の間が 3.85、保育所と施設の間が 3.00 であった。

E. 幼稚園教育実習後のイメージ (Fig. 5)

次に、3 週間にわたる幼稚園実習後のイメージを検討してみよう。実習後の幼稚園に対するイメージは、明るく、活動的で、楽しく、親しみやすく、充実しているというイメージであり、実習前とあまり変化はない。各イメージ間の距離 D_{ij} は、幼稚園と保育所の間は 1.87、幼稚園と施設の間は 3.83、保育所と施設の間は 2.65 であった。

F. 幼稚園教育実習の影響について (Fig. 6)

施設実習の場合と異って、幼稚園実習は、幼稚園に対するイメージにはほとんど影響を与えていないように思われる。実習の前後で変化が見られた項目は、<たのしいー苦しい><健康なー不健康な>の 2 対であり ($P < .001$)。実習体験が幼稚園をよりたのしいが、思った程健康的ではないと感じさせたようである。さらに<親しみやすいー親しみにくい>の対では、親しみやすさが増加している傾向が見られた ($P < .05$)。また、実習の前後のイメージ間の距離 D_{ij} は 1.23 であった。

幼稚園教育実習が、保育所および施設に対するイメージに与えた影響はほとんどなく、実習の前後でのイメージ間の距離 D_{ij} は、保育所では 0.63、施設については 0.82 であった。

考 察

児童福祉施設実習および幼稚園教育実習の体験によって、学生が幼稚園、保育所、施設に対して持っていたイメージが、どのように変化するかを調べたが、その結果について、2、3 考察を加える。

第 1 に、実習によるイメージの変化は、施設実習では大きく、幼稚園実習では小さかった。すなわち、施設実習を体験したことによって、施設に対するイメージは大きくプラスの方向へ変化したが、一方、幼稚園実習の体験は、楽しさ、親しみやすさについてはプラスの変化、健康のかどうかについてはマイナスの変化を起させたが、それ以外ではほとんど変化が見られなかった。一般に、実習前には、施設に対しては、本研究でとり上げた幼稚園、保育所に比較して、苦しく、暗く、きたなくて、窮屈な、親しみにくく、不健康で、地味で、不安定で、古めかしく、不活発であるというイメージを持っており、かつ一方では、静かで、きびしく、重要であるというイメージも持っている。このようなイメージを学生が持つようになる原因は究明され、できるだけ、正しいイメージを持たせるような教育がなされねばならない。本研究の対象になった学生は、幼児教育学科に入学して、約 1 年間の教育を終えてから、施設実習に出るのであるから、児童福祉施設については一応知識を得ており、将来、幼児教育者になろうとする心構えもかなりの程度に出来上っているはずなのだが、やはり、施設に対しては、暗い、マイナスのイメージが強い。このことについては、保母養成にたずさわっている我々が十分に反省しなければならない。しかし、大学内の養成教育には

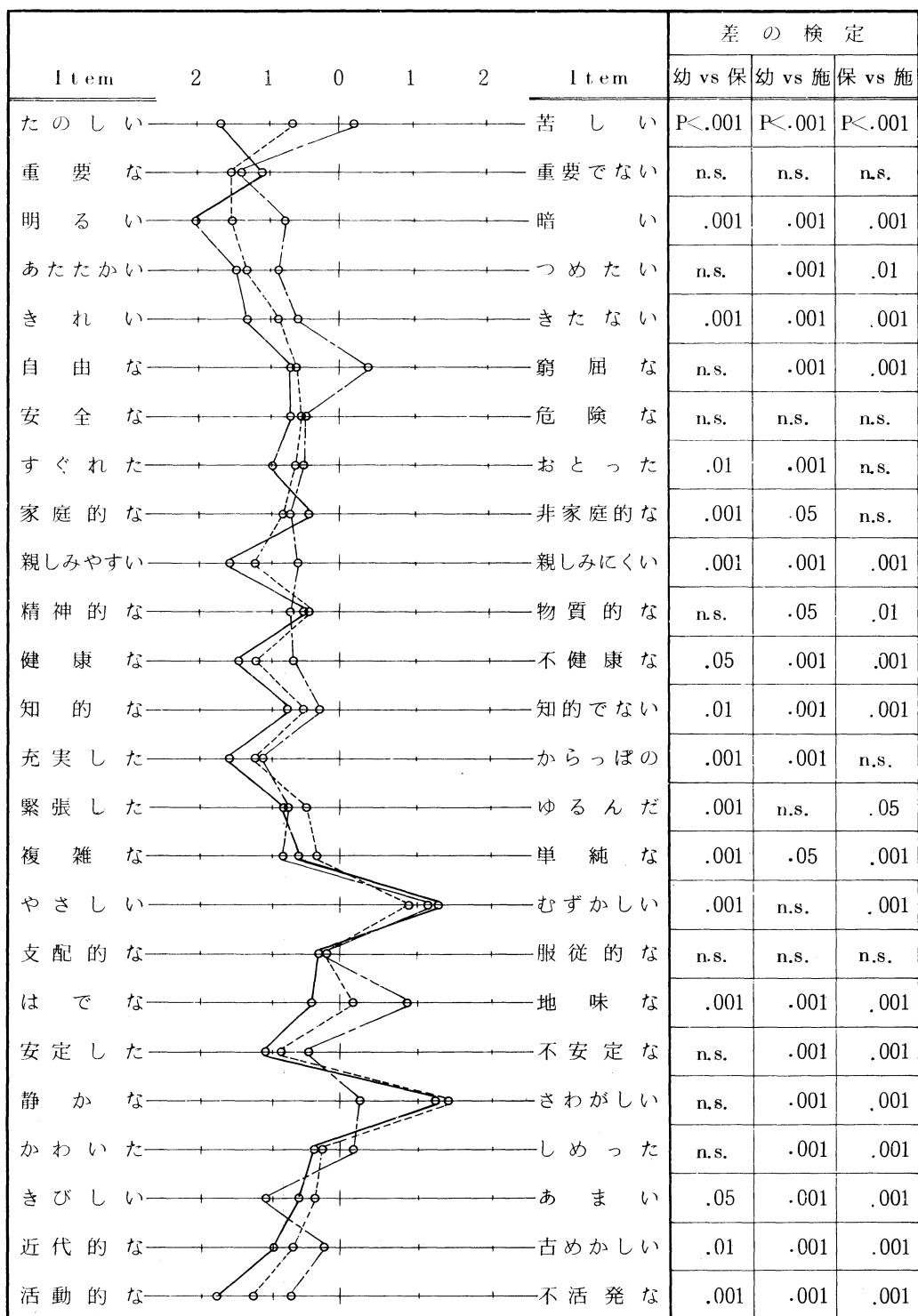


Fig. 5 教育実習後の幼稚園・保育園・施設に対するイメージ

○—○ 幼稚園
○---○ 保育園
○—○ 施設

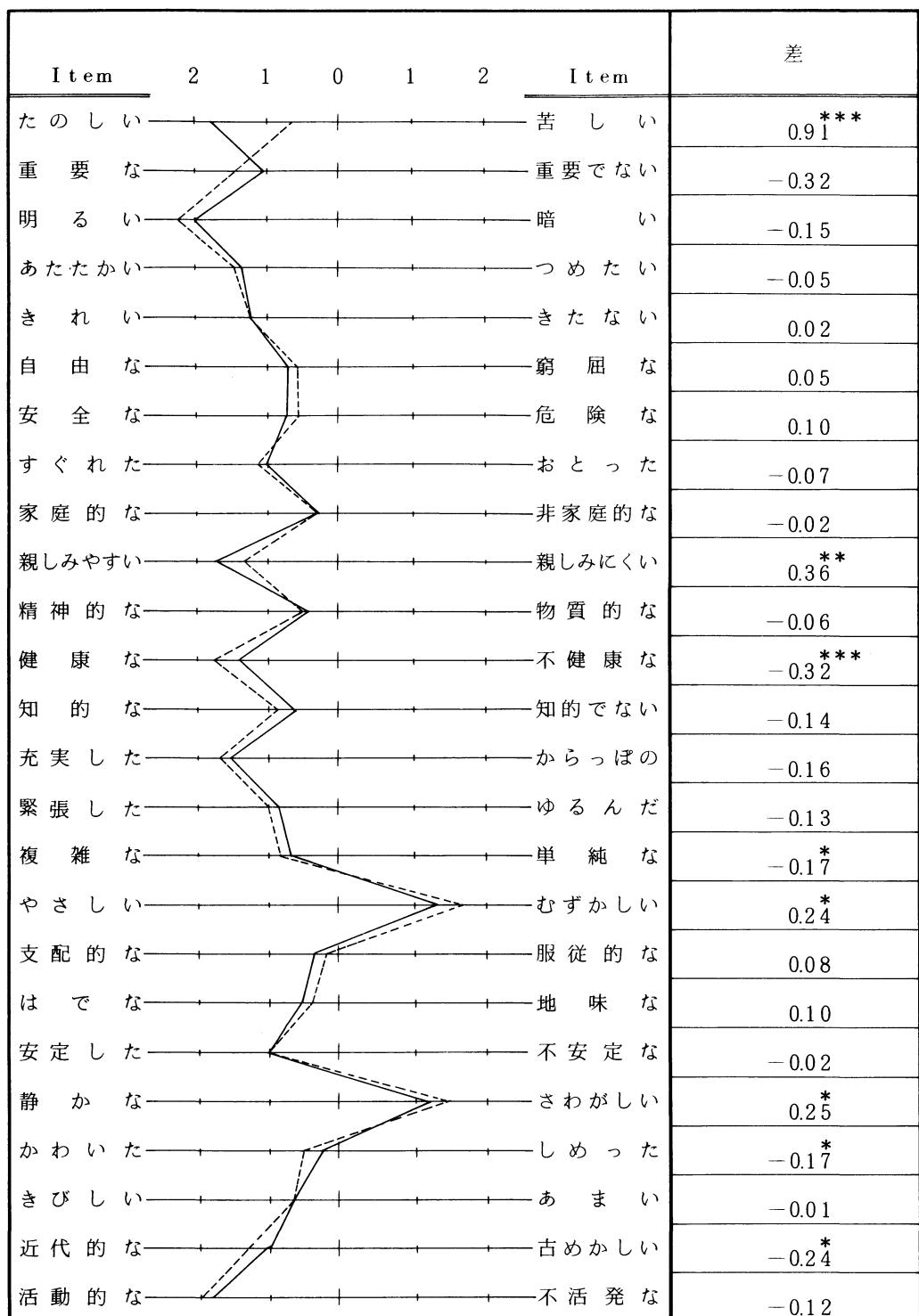


Fig. 6 教育実習による幼稚園に対するイメージの変化

----- 実習前

—— 実習後

限界があることも事実であろう。その様なイメージを持って、種々の児童福祉施設に実習に出た学生は、今まで知識としてしか身につけていなかった施設について、直接体験し、驚きの目で色々な見聞をするであろう。施設の近代的な諸設備を見たり、収容されている児童と共に生活し、また施設職員の人間関係や勤務の様子に直接接することを通じて、実習前に持っていたイメージが急速に消え去り、10日間の実習期間中に盛りだくさんに吸収した体験によって、以前とはまったく変わった新しいイメージが生れてくる。この新しいイメージは、施設は、明るく、たのしく、あたたかく、親しみやすく、家庭的であり、活動的で、自由で、充実している所であるという、プラスのイメージとなるのである。

保育実習の目標の第1に挙げられている、『児童福祉施設の内容、機能等を実地の体験を通して理解させる。』（注1）、は施設に対するイメージの変化という観点から見れば、かなりの程度に達成されていると考えても良いであろう。

しかし、幼稚園実習によっては、イメージがあまり変化しなかった点については、次のようなことが考えられるであろう。

幼児教育を志す学生は、幼稚園に対しては、すでに、かなり確立されたイメージを持っており、さらに、養成機関においてもどちらかと言えば、幼稚園・保育所の保育に重点を置いた教科内容が多いために、実習体験がイメージの変化にあまり影響しなかったのではないかと考えられる。しかし、学生にとっては、3週間の幼稚園実習は、幼児と直接に接し、園の職員の親切な指導を受けたことが印象的であり、そのことが、イメージをより楽しく、より親しみやすいという方向に変化させ、一方では、園内の人間関係など、今まで外から見ていた場合には想像も出来なかっ事を実習中にわずかにでも観察したことが、意外に健康的ではないというイメージを作ったのではないかと思われる。

第2に、施設実習の直後には、施設に対するイメージは非常にプラスのイメージに変化していたのであるが、この変化は学生の内面に完全に固定化されたわけではなく、約4か月後には施設実習前のイメージ程ではないが、マイナスの方向へ戻っている。実習によって、学生自身が持っている、児童観・保育観を確立して行くことも、実習の大きな目標があるので、保母養成にたずさわっている我々は、施設実習という貴重な体験をさらに生かした教育をするよう努力して行かねばならないであろう。

最後に、各施設に対するイメージの中には、学生が幼稚園、保育所および児童福祉施設の内容や、共通点、相異点を確実に理解していないことによって、不正確なイメージを形成している点が見られる。幼児教育者を養成する立場にある我々は、このような現実をふまえて、学生が自分自身の児童観・保育観を確立していくために、どのような指導をすればよいかを考え、保育の場について正確な理解を持ったより良い幼児教育者・保育者を育てていかねばならない。

（注1）「保母養成専問教科教授内容ソースブック」より引用。

○本研究の資料収集にあたっては、美作女子大学短期大学部幼児教育学科昭和52年度入学生全員の方々の御協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 日名子太郎 「保育実習」（現代保育研究7） 福村出版、1976。
- 厚生省児童家庭局 「保母養成専門教科目教授内容ソースブック」 日本児童福祉協会、1972。
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957, *The measurement of meaning*. Urbana; Univ. of Illinois Press.
- 笛野完二 保育学生の興味尺度の検討（3）職場のイメージとの関係 岡山心理学会発表、1977。
- 珠川善子・田中未来・斎藤謙 「保育所実習」 川島書店、1970。